

2024年7月7日（日）「大群衆の賛美」

ヨハネの黙示録 7:9-17

9 この後、私は数えきれぬほどの大群衆を見た。彼らはあらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手にとって、玉座と小羊の前に立っていた。10 彼らは声高らかに言った。「救いは、玉座におられる私たちの神と小羊にある。」11 また、天使たちは皆、玉座と長老たちと四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、12 こう言った。「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、権威が、世々限りなく私たちの神にありますように、アーメン。」

13 すると、長老の一人が私に問いかけた。「この白い衣を身にまとった者たちは誰か。またどこから来たのか。」14 そこで私が、「私の主よ、それはあなたをご存じです」と答えると、長老は言った。「この人たちは大きな苦難をくぐり抜け、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。15 それゆえ、彼らは神の玉座の前にいて、昼も夜も神殿で神に仕える。玉座におられる方が、彼らの上に幕屋を張る。16 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどのような暑さも、彼らを打つことはない。17 玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へと導き、神が彼らの目から涙をことごとく拭ってくださるからである。」

【序論】

先ほど讃詠で歌った讃美歌 162 番は、「天つ御使いよ」「命を献げし証人よ」「世の罪人らよ」「萬の国人（よ）」と、各節で呼びかけています。彼らに「(イエスを) 主と崇めよ」と賛美の勧めをしているのです。今日の箇所に見られる終末的大合唱を見事に反映した讃美歌だと思います。私たちが礼拝で歌う賛美は、終末的の神の国の賛美と一つにされているはずであり、それだけに心を込めて歌い天まで響かせたいものです。私たちは日常生活の中で永遠の世界に思いを馳せる時間をどれくらい持っているのでしょうか。地上での生活が死後に見る「贖われた世界」とのつながりを持っているということ、今日も御言葉から読み取り、よくイメージできるようになりたいと思います。

【本論】

本論 1. 白い衣を着た大群衆

この後、私は数えきれぬほどの大群衆を見た。彼らはあらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手にとって、玉座と小羊の前に立っていた。(7:9)

ここに登場する「大群衆」の内訳は「あらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民」であることから、異邦人世界でキリスト者となった人々を指すと考える人もいますが、これはおそらく、

先の「十四万四千人」(7:4)の言い換えでしょう。イスラエル人と異邦人の両方から集められた人々であり、最後まで信仰に立ち続けたキリスト者です。アブラハムが神様から約束されたことばがここに成就していると考えられる。

主はアブラムを外に連れ出して言われた。「天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」(創世 15:5)

アブラハムの信仰の子孫として世界中から集められた人々。「十四万四千人」というのは「神の民全体」を表す象徴的数字であり、「数えきれぬほど」多くの(星の数ほどの)人数が一堂に会しているのです。この人々は、外観的に二つの特徴を持っています。

① 白い衣を身にまとっている

「白」は「聖さ」の象徴であり、その衣を着ている人が罪赦された存在であることを表しています。キリストの義の衣を着ている人々。14節では「その衣を小羊の血で洗って白くした」と言われていますが、普通なら「血」で洗った衣は赤く染まるはずでしょう。しかし、天においては主の血で洗われたものは罪が聖められ純白となるのです。この衣のイメージは、主イエスが山の上で変貌されたときの衣と同質のものと考えられます。

六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。すると、彼らの目の前でイエスの姿が変わり、衣は真っ白に輝いた。それは、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほどだった。(マルコ 9:2-3)

地上の生涯においてどんな罪を犯した人であっても、この純白の衣を着るならば栄光の姿に輝くのです。

② なつめやしの枝を手に持っている

「なつめやし」は「勝利」の象徴であり、イスラエルでは仮庵祭のときに手に持って賛美されたといえます。

すべての町とエルサレムに次のような布告を出さなければならない。「山に行き、オリーブの枝、松の枝、ミルトスの枝、なつめやしの枝、葉の茂った木の枝を取って来て、書かれているとおりに仮庵を作りなさい。」(ネヘミヤ 8:15)

仮庵祭とは、イスラエルの民がエジプトでの奴隷生活から解放されて荒野で仮庵を作って住んだことの記念であり、神が自分たちに勝利をもたらしてくださったことの祝いです。そして、これはキリスト者が地上の旅路を終えて永遠の世界に移される「勝利」とも重なってくるでしょう。

大群衆についての更に詳しい説明が「長老」からなされます。

すると、長老の一人が私に問いかけた。「この白い衣を身にまとった者たちは誰か。またどこから来たのか。」そこで私が、「私の主よ、それはあなたのご存じです」と答えると、長老は言った。「この人たちは大きな苦難をくぐり抜け、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである。」

(7:13-14)

ここでの長老の質問は、分かっていることを敢えて尋ねているような感じがします。ヨハネには答えることができませんが、それを教えようとしている意図が込められています。長老が説明するところによると、この大群衆は「**大きな苦難をくぐり抜け**」て来た人々のようです。世の終わりの破局的な患難と、キリスト者であるがゆえに味わった苦難について言われているのでしょう。私たちを含め、それらの苦難を乗り越えることができるのは、主イエスの守りによるほかありません。

本論 2. 賛美の応酬

彼らは声高らかに言った。「**救いは、玉座におられる私たちの神と小羊にある。**」(7:10)
まず、大群衆が声を合わせて賛美します。ここでは「**神**」と「**小羊**」が同列に並べられていて、父なる神様と子なるキリストが共に神の国を治めている様子が描き出されています。「**神が救い主である**」ことを示す表現は旧約聖書によく出てきます。

- ・ **主よ、私はあなたの救いを待ち望む。**(創世 49:18)
- ・ **だが、私は感謝の声を上げ、あなたにいけにえを献げ、誓いを果たそう。救いは主にこそある。**(ヨナ 2:10)
- ・ **救いは主のもの。あなたの民の上に祝福を。**(詩編 3:9)

大群衆の賛美に呼応するように、天の軍勢が賛美を始めます。

また、天使たちは皆、玉座と長老たちと四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、こう言った。「**アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、権威が、世々限りなく私たちの神にありますように、アーメン。**」(7:11-12)

「**玉座と長老たちと四つの生き物**」という神を取り巻く側近たちの構図は4～5章に出てきましたが、ここで再び登場します。天使の賛美の冒頭で「**アーメン**」と言われていますが、これは大群衆が歌った事柄に同意したということ。そして、彼らも神を誉め讃え、「**賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、権威**」と七つの属性を神に帰しています。このように神の属性を並べる例は、これまでも何度か出てきました。

- ・ **あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。**(4:11)
- ・ **屠られた小羊こそ、力、富、知恵、権威、誉れ、栄光、そして賛美を受けるにふさわしい方です。**(5:12)
- ・ **玉座に座っておられる方と小羊に、賛美、誉れ、栄光、そして力が世々限りなくありますように。**(5:13)

これらに対し、今回初めて出てきたのが「**感謝**」です。これは天使たちが神にささげる感謝のことが言われているのでしょう。

本論 3. 大群衆の天での扱い

それゆえ、彼らは神の玉座の前において、昼も夜も神殿で神に仕える。玉座におられる方が、
彼らの上に幕屋を張る。(7:15)

大群衆は常に「神の玉座」の前で四六時中神に仕えると言われていました。「天国では何を
するの？」と子どもが問うてくるなら、「それは永遠の礼拝だよ」と答えることができます。
「そんなのつまらない」と言うのであれば、「どんなことをするのも楽しくて仕方がなく、
神様が造られたものを発見に次ぐ発見をする毎日なんだよ」と答えます。

神は彼らの上に「幕屋を張る」。幕屋とは、雨風から人を守るもの。神の民は永遠に神の庇
護の下に置かれる。ここに「神殿」「幕屋」という二つの表現が出てきますが、これらは本
質的に「神の臨在」を表すものであり、神がどんなときにも共にいてくださることを意味し
ます。この恵みは現在において既に始まっている。主イエスを信じる人自身が「神殿」なの
であり、インマヌエルは私たちの内側で既に始まっているのです。

彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどのような暑さも、彼らを打つことはない。
(7:16)

地上にあっては「飢え」も「渴き」もあります。パレスチナにおいて大敵である「暑さ（日
照り）」についても言及されている。災害時に最も困るものとは、食糧、水、エネルギー、
トイレ。これらのものは、インフラが完備されている現在、通常はワンタッチで使用するこ
とができます。しかし、それらが失われたときの苦労は想像を絶するものがあります。戦時
下にあるパレスチナの現在の状況、震災に遭われた能登地方の人々の生活を案ずるもので
す。物質的なものだけでなく、人間は霊的に渴くということがある。主イエスが「人はパン
だけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」（マタイ 4:4）と語
られたように、人は魂の満たしを常に求めてもいるのです。永遠の世界においては、魂の養
いが神から直接、流れる川のごとくすべての人に与えられると約束されています。

玉座の中央におられる小羊が彼らの牧者となり、命の水の泉へと導き、神が彼らの目から
涙をことごとく拭ってくださるからである。(7:17)

主イエスご自身が羊飼いとなって一人びとりを養い、いのちの水を飲ませてくださる。そし
て、この地上で味わうような悲しみは二度と経験することのない、喜びと平安に満ちた世界
で永遠に生きるのです。この幸いは、19章、21章において改めて語られることになりま
すが、黙示録は少しずつ新天新地の全貌を明らかにしながらクライマックスに至ります。

【結論】

私たちが今、礼拝に参加し、御言葉に耳を傾け、賛美をささげるということは、やがて永
遠の世界で味わう幸いの先取りであります。私たちがまた、「大群衆」の一人として、彼ら
と共に賛美をささげることになるでしょう。その日を思い描きながら、日曜日だけでなく平
日にも、永遠の神の都にある自分の姿を垣間見ながら歩んでいきたいと思えます。

【祈り】

永遠の祝福の基であられる天の父なる神様。私たちが地上で歌う賛美が終末的神の国の大群衆の賛美と一つであるということを思います。そして、私たちもやがてその一人に加えられる日を夢見ています。そのとき、私たちに着せられている純白の衣、それはキリストの義です。私たちを愛し、尊いいのちを十字架でささげてくださった主イエスの愛を身に纏った者が、ついに一堂に会するのです。その喜びの日を今より胸に描きながら地上で与えられた一回一回の賛美の機会を大切にいたします。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

全歴史を通ずる神の民を、終わりの日に御許に集め給う、父なる神の愛、
贖われた者にご自身の義の衣を纏わせ給う、主イエス・キリストの恵み、
地上の賛美を、大群衆の賛美と一つになし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。